

宮澤賢治全集

1

筑摩書房

宮澤賢治全集第一卷

昭和四十三年一月三十日 初版第一刷發行
昭和四十三年四月五日 初版第二刷發行

著 者 宮 澤 賢 治

發 行 者 竹 之 內 靜 雄

發 行 所 株式會社 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話東京(二九一)七六五一(代表)
振替 東京 四 一 二 三

印刷・精興社
製本・美行製本

目次

和歌

明治四十二年四月より	三
明治四十四年一月より	五
明治四十五年四月	一五
大正三年四月	二七
大正四年四月	三七
大正五年三月より	八二
大正五年七月	一〇九
大正五年十月より	一三二
大正六年一月	一五〇

和

歌

明治四十二年四月より

明治四十二年四月十二日

盛岡中學校寄宿舎に入る

父に伴はれたり 舎監室にて父大なる銀時計を出して一時なり呟けり

中の字の徽章を買ふとつれだちてなまあたかき風に出でたり

父よ父よなどて舎監の前にしてかるとき銀の時計を捲きし

藍いろに點などうちし鉛筆を銀茂よわれはなどほしからん

公園の圓き岩べに蛭石をわれらひろへばぼんやりぬくし

のろぎ山のろぎをとればいただきに黒雲を追ふその風ぬるし

のろぎ山のろぎをとりに行かずやとまたもその子にさそはれにけり

きしきしと引上げを押しむらさきの石油をみたす五つのラムプ

タオルにてぬぐひ終れば臺ラムプ石油ひかりてみななまめかし

うすあかきタぐれぞらに引きあげのラツパさびしく消えて行くなり

あざむかれ木村雄治は重曹をインクの瓶に入れられにけり

ホーゲーと焼かれたるまま岩山は青竹いろの夏となりけり

鬼越の山の麓の谷川に瑪瑙のかけらひろひ來りぬ

明治四十四年一月より

柳澤

こゆれば山の裾野にて

けはしき雲の流るるを

海鼠のにはひいちじるく

きみかげさうの花さけば

馬は黒藻に飾られぬ

み裾野は雲低く垂れすずらの

白き花咲き　　はなち駒あり

這ひ松の雲につらなる山上の

たひらにそらよいま白み行く

這ひ松の

なだらを行きて

息はける

阿部のたかしは

がま仙に肖る

さすらひの樂師は町のはづれとてまなこむなくけしの莖嚙む

冬となりて梢^{うね}みな黝む丘の邊に

夕陽をあびて白き家建てり

ホーゲー

岩山の

まつ青の草に雲たたみ

三角標も

見えわかぬなり

雲くらく東に疊み

岩山の

三角標も見えわかぬなり

小岩井の育牛長の

一人子と

この一冬は

机ならぶる

臥してありし

丘にちらばる白き花

黎明のそらのひかりに見出でし

鐵砲が

つめたくなりて

みなみぞら

あまりにしげく

星 流れたり

鐵砲を

胸にいだきて

もそもそと

菓子を食べるは

吉野なるらん

ひがしぞら

かがやきませど丘はなほ

うめばちさうの夢をたちつ

ひとびとに

おくれてひとり

たけたかき

橘川先生野を過ぎりけり

追ひつきおじぎをすれば

ふりむける

先生の眼はヨハネのごとし

家三むね

波だちどよむかれ蘆の

なかにひそみぬうす陽のはざま

新らしく買ひしばかりの外套を

その兒來りて貸し行きにけり

午なれば山縣舎監千田舎監

佐々木舎監も

歸り來るなり

中尊寺

青葉に曇る夕暮の

そらふるはして青き鐘鳴る

にせものの像を指し

さりげなく

そらごといへば

いよよさびしき

桃青の

夏草の碑はみな月の

青き反射のなかにねむりき

まぼろしとうつとわかずなみがしら

きはひ寄するをあやしみるたり ☆

河岸の杉のならびはふくろふの

聲に覺ゆるなつかしさもつ

とろとろと甘き火をたきまよなかの
み山の谷にひとりうたひぬ

龍王をまつる黄の旗紺の旗
行者火渡る日のはれぞらに

樂手らのひるは錆びたるひと瓶の
酒をわかつて　戯れごとを言ふ

たいまつ

火照りに見れば

木のみどり

岩のたちまひ胸ぞ鳴りくる　☆

夜の底に雲しづみたれば野馬どち火をいとほしみ集ひ來らしも

雲垂れし裾野のよるはたいまつに
人をしたひて 野馬馳せくる

そらいろのへびを見しこそかなしけれ
學校の春の遠足なりしが

十二室

青々と木の芽は暮れてどの室もむつとあたたかきラムプのいきれ
ラムプもちならびてあれば青々と廊下のはてに木の芽ゆれたり

そら耳かいと爽やかに金鈴の
ひびきを聞きぬ しぐれする山

瞑すれば灰いろの家丘にたてり